

原子力（核兵器と原発）と人間の関係—私の最後の問題意識は“哲学”だ

福島第一原発事故後も、原発の再稼働が始まっています。懲りない原発村の人達と対決して、原発を全基廃炉にすることは、まだまだ多くの労力と時間がかかります。原子力（核兵器と原発）と人間の関係について、私としては、科学や社会・政治・経済・環境等について考えた結果、私は、最終的には“哲学”の問題だと思います。今回は、「核の最終処分場」について考えます。

■北欧、最終処分場の立地に成功 核ごみ処理 透明性カギ

「2019年9月に表面化した関西電力の金品受領問題は、電力会社と原発立地自治体との不透明な関係をあぶり出した。だが世界では地元の信頼を勝ち取り、原子力発電の最も難題とされている最終処分場の選定・建設に進んだ国々もある。共通するのは徹底した透明性だ。疑惑を持たれないようにする仕組みをつくり、時間をかけて信頼を醸成した。現場にヒントを探った。

◇時間をかけ地元と信頼醸成—スウェーデンの最終処分場（オスカーシャム）

「昨日も同じ場所で地元関係者を招いた説明会を開きました」。11月下旬、スウェーデン南部のオスカーシャム。核のごみを埋める最終処分場の関連施設を作ることが決まり、スウェーデン核燃料・廃棄物管理会社（SKB）の担当者は自治体や住民との密な意思疎通をとっていると強調した。核のごみとは、原子力発電所の使用済み核燃料から出る高レベル放射性廃棄物。原発保有国は核のごみの処分を避けて通れない。現段階では地中深くに埋める「地層処分」が世界の主流だ。放射能が無害化されるまで10万年単位で地下400～500mの施設に保管する。オスカーシャムでは核のごみを主に銅製容器に封入し、約400km北のフォルスマルクで最終処分する。2029年にも処分を始める計画だ。SKBのシモン・ホフ報道官は「我々の事業で最も重要なのはすべてオープンにする透明性だ」と語る。

◇独立の安全審査機関—フィンランドの最終処分場（オルキルオト）

2016年12月、世界初の最終処分場の建設が始まったフィンランド。ロシアの脅威に対峙してきた同国にとってエネルギー面の独立は死活問題で、原子力が電力供給の4分の1を占める。最終処分の議論が始まったのは、1980年前後で、30年以上をかけて建設にこぎ着けた。自国の原発で発生する放射性廃棄物は国内で処分すると1994年に法律で定め、2001年には南西部オルキルオトに処分場をつくと決めた。どうやって地元の信頼を高めたのか。そのカギの1つは、高い独立性を持つ安全審査機関だ。フィンランドの原子力規制機関である放射線・原子力安全センター（STUK）は政府の一機関だが、政治家の介入は受けない。原子力推進の立場はとらず、ルールに基づき安全を審査する。最終処分関連を担当するハマライネン氏は「技術者の立場で審査を積み重ねてきたことが信頼につながったのではないかとみる。フィンランドで処分場を運営する

ポンバ社は本社をオルキオトに構え 80 年ごろから密接に地元と意見交換を重ねてきた。パシ・トゥヒマ広報部長は「信頼を築くのに長い時間がかかるが、崩れるのは一瞬だ」と話す。フィンランドが最終処分場をつくるまで計画から 30 年以上かかった。日本も信頼回復にはそれ以上の努力が求められる。(オスカーシャム=竹内康雄、中西誠)」（「日本経済新聞」2019 年 12 月 21 日付け）

3. スウェーデンの使用済燃料貯蔵

敷地外(オスカーシャム原子力発電所に隣接)地下(約40 m) プール貯蔵施設(CLAB)。

1985年に運転開始し、貯蔵容量は8,000tUで、現時点で5,000tUの使用済燃料が中間貯蔵されている。

地下が強固な岩盤であることから、天然の遮蔽機能を有する。



© CRIEPI 2014

スライド17/28枚目

【スウェーデンの最終処分場 (オスカーシャム)】



図-1 フィンランドの最終処分場サイト (オルキオト) の位置

【フィンランドの最終処分場 (オルキオト)】